



→久しぶりに雨が降らなかった日曜日の20日は、やっとお客さんが戻ってきた。

←モンズズメバチ。幼虫のエサはセミだという。セミを襲って食いはじめたモンズズメバチ。



東京では、今日で二十日連続で雨が降っている。

夜のうちに降り、明けるとやむ日何日かあったが、九日に気温三十七度だったほかは、十一日などは十四年ぶりに気温が二十五度を下回った。

「東北のほうは大変だろうなあ。むかしだったら、たくさん餓死者が出たことだろうよ」

嫁さんが岩手県の生まれのせいで舟頭さんは、この冷夏がことのほか気になるようだ。

大正時代には冷夏により稲作の不作で米騒動が起こっている。

平成五年には梅雨前線が長期間停滞し、八月下旬になって気象庁は梅雨明け宣言を取り消した。当然、冷害。

オホーツク海高気圧が強く、太平洋高気圧が日本列島の南の海上から北上できないせいで、いつまでも夏がやって来ない。しかも、オホーツク海高気圧から吹き下ろす風が東北地方を中心に吹いてくる。これをヤマセと呼び、宮沢賢治は有名な詩『雨にも負けず』のなかに「：日照りの時は涙を流し、

## 今週のクマ

→雨続きで地上に上がってきたクロベンケイガニを捕まえて得意気なクマ。



→日照不足で生育が遅れた花。時計まわりにカボチャ、トウガン、スイカ。松休みが終わってから実が採れるかどうか？



寒さの夏はおろおろ歩き：」と東北地方に冷夏が訪れたときのことをこう表現している。これがヤマセのことだ。

「いまは稲も改良されて、あるていどの寒さにも耐えられるだろうけど、それでも収穫量はおちるだろうなあ」

舟頭さんは心配する。

東北地方も心配だろうが矢切の渡しも大変だ。例年の半分もお客さんがやって来ない。売店の売り上げの中心になっているゴルフ客もやはり、こう雨続きでは少ない。東北の冷害を心配しているところではないはずだが、舟頭さんは、

「この冷夏もこたえるけど、それより怖いのはやっぱり台風だよ。台風がやってくると雨が降って川が氾らんする。そうしたら一週間以上、舟が出せない。それに栈橋も直さないといけないし……」

もう秋の気候を心配する。

好天の日、のんびりと江戸川を行く舟のうらには、舟頭さんのこんな気苦労もあるのだ。来週は夏が戻ってくると気象予報士たちはいうが、実際に当日になってみないとわからない。

とりあえず、来週からの夏の戻りを期待しよう。太陽が恋しい。